

ADRA Japan

ANNUAL REPORT 2024

2024年度 活動報告



すべての人に安心して帰れるおうちを（アフガニスタン地震で家を失った方に住宅を支援）



Justice.
Compassion
Love



ADRA

ADRA Japan
2024年度事業概要

ADRA Japan事業実施国

世界のADRA支部がある国と地域
ADRA Japan ANNUAL REPORTADRA Japan
日本支部ADRA
International
世界本部① JAPAN
日本

- 能登半島地震被災者支援
- 東日本大震災復興支援
- 国内災害被災者支援
- 防災・減災活動
- 緊急支援事業の調査、資金支援等
- インターン受入
- 講師派遣
- 関係団体との連携
- 事業報告会
- 小・中学校訪問・受け入れ

② TAIWAN
台湾

- 地震被災者支援

③ NEPAL
ネパール

- スポンサーシップ
- 栄養・水衛生支援
- 医療チーム派遣事業

④ MYANMAR
ミャンマー

- 国内避難民支援

⑤ ZIMBABWE
ジンバブエ

- 住民参加型学校開発支援

⑥ BRAZIL, PAPUA NEW GUINEA, INDIA, BANGLADESH, VIETNAM, MYANMAR, PHILIPPINES
ブラジル、パプアニューギニア、インド、バングラデシュ、ベトナム、ミャンマー、フィリピン

- 水害被災者支援

⑦ AFGHANISTAN
アフガニスタン

- 地震被災者支援

⑧ GAZA, LEBANON
ガザ、レバノン

- 人道支援

⑨ MONGOLIA
モンゴル

- 農牧業による生活向上支援

⑩ UKRAINE, SLOVAK REPUBLIC
ウクライナ、スロバキア

- 人道支援

⑪ YEMEN
イエメン

- 国内避難民支援

⑫ ETHIOPIA
エチオピア

- 紛争危機および干ばつ対応水衛生支援
- 平和的共存促進および水衛生支援



ADRA Japan ANNUAL REPORT CONTENTS

- 02 2024年度事業概要
- 04 ご挨拶
- 05 ADRAの活動分野の紹介・SDGsについて
- 06 ADRA Japan 40年の歩み
- 08 数字で見る一年間の活動
- 09 台湾(地震被災者支援)
- 10 日本・能登半島(地震被災者支援)
- 11 ネパール(医療チーム派遣)
- 12 ガザ・レバノン(人道支援)
- 13 ブラジル、バブアニューギニア、インド、ほか
(水害被災者支援)
- 14 ウクライナ(人道支援)
- 16 イエメン(国内避難民支援)
- 18 アフガニスタン(地震被災者支援)
- 20 ジンバブエ(住民参加型学校開発支援)
- 21 ネパール(スポンサーシップ)
- 22 エチオピア(紛争危機および干ばつ対応
水衛生支援、平和的共存促進および水衛生支援)
- 24 ミャンマー(国内避難民支援)
- 25 ネパール(栄養・水衛生支援)
- 26 モンゴル(農牧業による生活向上支援)
- 27 日本(防災・減災活動)
- 28 人材育成・啓発
- 30 2024年度事業一覧
- 32 企業との連携
- 34 SPECIAL THANKS
- 35 メディア掲載
- 36 ADRA Japanの情報発信と取り組み
- 37 ADRA Japanについて・主な加盟ネットワーク
- 38 活動計算書および貸借対照表
- 39 2025年度の基本方針

ご挨拶 Greetings

太 平洋戦争終戦から40年後の1985年にADRA Japanは生まれました。戦後の困難な時代に、世界の人々によって支えられてきたことを感謝し、今度は世界を支える側に立ちたいという思いで活動を始め、今年で40年が経ちました。すべてがゼロからのスタートでしたが、1995年の阪神淡路大震災をはじめ国内外の緊急支援や海外における開発支援を継続できたのは、ひとえに皆さまのご支援によるものです。心から感謝申し上げます。

2024年度は、3年間の中期方針の2年目となる年度であり、「一つひとつの命を大切に社会の環(わ)を拡げる活動・取組の創出と運営基盤の強化」に向けて、取り組ませていただきました。

皆さまからのあたたかくまた心強いご支援により実施しました2024年度の事業の成果を、ADRA Japan年次報告書としてお届けできますことを心から感謝申し上げます。ご一読いただけますようお願い申し上げます。

設立40周年を迎え、「希望とちからを手から手へ」をスローガンに、これからもすべての活動に心を込めて取り組んでいく所存です。これからもご支援くださいますよう、お願い申し上げます。

皆さまの健康と生活、安全が守られますようお祈りさせていただきます。



特定非営利活動法人 ADRA Japan
理事長 柴田 俊生

未来をひらく教育支援

安心して学べる環境がない子には丈夫な校舎を、学校に行ったことがない子には特別教室を、学校に通うお金が足りない子には学資支援を届けます。



教育
Education

尊厳をまもる保健衛生

人としての尊厳ある生活を送れるように、きれいで安全な水を確保し、衛生的に暮らせる環境を整えます。また、保健衛生に関する知識を伝えます。



保健・衛生
Health

ADRAの活動の 四本柱



生計向上
Livelihood

暮らしを支える生計向上

収入がないために明日の食べ物、必要な医療、教育をおきらめざるを得ない状況を抜けるために、地域にあった持続可能な収入の手段をもてるようサポートします。



緊急支援
Emergency

命をつなぐ緊急支援

紛争や災害のために避難を余儀なくされている方々に、水や食料、住まいの確保など、命に直結する支援を届け、心のケアや生活相談など、生きる希望を見出せるような活動にも取り組みます。

持続可能な開発目標(SDGs)



SDGsとは? 持続可能な開発目標(SDGs)は、貧困や不平等・格差気候変動などのさまざまな問題を根本的に解決することを目指す、世界共通の17の目標です。



ADRA Japan 40年の歩み

40年間支援してきた国は73ヶ国

1985年

・ADRAの日本支部としてADRA(アドラ)国際援助機構が設立



1999年

・コソボにて救援活動を実施



1986年

・ADRA通信(現ADRA季刊誌「ひかり」)を発刊



2000年

・ADRA国際援助機構からADRA Japan(アドラ・ジャパン)に名称を変更



1988年

・学生ボランティア派遣事業を開始(マレーシア)



2004年

・アフリカに日本人駐在員を派遣(リベリア)
・特定非営利活動法人として認証



1991年

・ADRAのロゴが変更



2005年

・スーダン/南スーダン難民支援事業を開始



1995年

・阪神淡路大震災被災者支援を実施
・ネパールにて口唇口蓋裂医療チーム派遣事業を開始



2006年

・インドネシア・ジャワ島中部にて地震被災者支援事業を実施



1996年

・ネパールにて教育スポンサーシップ事業を開始



2007年

・新潟中越沖地震被災者支援事業を実施



1997年

・アジアに日本人駐在員を派遣(モンゴル)



2008年

・中国・四川地震被災者支援事業を実施
・季刊誌をカラーに刷新



2009年

・ジンバブエにて水衛生、教育支援事業を開始
・ADRAフレンド(マンスリーサポーター)を開始



2010年

・アフガニスタンにて教育支援事業を開始



2017年

・九州北部豪雨被災者支援事業を実施



2018年

・バングラデシュにてミャンマー避難民支援事業を実施



2011年

・東日本大震災被災者支援活動を実施



2018年

・西日本豪雨被災者支援事業を実施



2012年

・中南米に日本人駐在員を派遣(パラグアイ)



2020年

・季刊誌を8ページに刷新
・事業地において新型コロナウイルスの感染対策をしつつ事業を継続



2013年

・ミャンマーにて教育支援事業を開始



2022年

・ウクライナ人道支援を開始



2014年

・ケニアにて深井戸整備支援事業を実施



2023年

・アフガニスタン地震被災者支援を実施



2015年

・口唇口蓋裂医療チーム派遣事業20周年(20回目)



2024年

・能登半島地震被災者支援活動を開始



2016年

・熊本地震被災者支援事業を実施
・認定NPO法人になる



2025年

・ADRA NewsからADRA季刊誌「ひかり」に改名
・ADRA Japan設立40周年



数字で見る一年の活動

皆さまと一緒に届けた未来へのチカラ
～1年間の活動により多くの人々の生活が向上しました～

衛生や栄養改善の
知識が向上した人



約**24,000**人

ネパール、ミャンマー、エチオピア

水衛生環境が整備され安全な水を
飲めるようになった自治体



8自治体

ネパール

教育を受けられるように
なった子ども



190人

ネパール・ジンバブエ

収入をつくり生活が向上した人



約**50,000**人

モンゴル、イエメン

海外において
緊急人道支援を
受けた人



約**130,000**人

ウクライナ、ミャンマー、エチオピア、
アフガニスタン、ガザ、レバノンなど

国内災害時に
支援を届ける
ことができた人



約**6,500**人

石川

国際協力・防災・減災について
学んだ人



約**4,200**人

宮城、茨城、東京、神奈川、
沖縄 など

整備された教育環境で
学べるようになった子ども



1,122人

ジンバブエ

TAIWAN 台湾

地震被災者支援

花蓮県



食料や衛生用品が入った緊急支援ボックスは、
災害時の人々の暮らしと命を支えた。

花蓮県の人たちの暮らしと命を支え 地元民の生計をサポート

2 024年4月3日午前7時58分、台湾の花蓮県を震源にマグニチュード7.2の強い地震が起き、死者18人以上と負傷者1,100人以上の大きな被害をもたらしました。これは台湾で1999年に大きな被害を出したとき以来の地震で、各地で建物や道路、鉄道などが影響を受けました。

ADRAは現地パートナー団体とともに、地域で活動するNPO団体であるThe Mustard Seed Mission (MSM) や Chinese Christian Relief Association (CCRA) と連携して、避難所の運営、キャッシュ・フォー・ワーク(緊急雇用創出)、家屋の修理、水タンクの設置、家電製品や緊急支援ボックスの配付、資金援助などの支援を実施してきました。

花蓮県で復興支援活動が行われる中、大きな課題のひとつが地元の方々の生計維持です。花蓮県は観光業が収入の大半

を占めていますが、観光客は減少し、多くの人々は収入源を失いました。

観光バスの運転手として生計を立て、妻と娘の3人で暮らしていた阿丹さんもその一人で、仕事が見つからずとても落ち込んでいました。でも、震災後に地域の困窮者を雇用し、自立支援に取り組むMSMを訪ねて、そこでフードバンク運営のサポートをする仕事を紹介してもらい、収入を得て働くことができました。

「お陰で気持ちを安定させることができました。まずは現状を打破し、生活費を確保し、今後のことを考えていきたいと思っています」

この支援は経済的支援だけでなく、技術の習得もサポートしており、再就職や転職が有利になることが期待されています。



避難所のおかげで約2か月後に入居先が見つかるまで、不安のない日々を送れたと語る高齢の女性(中央)。
※本人の希望により写真を加工しています



フードバンクのサポートをする阿丹さん(右)。安堵の表情が読み取れる。



震災で屋根の水タンクが落ちて壊れた複数の家屋に、新しいものを設置。水が使える生活を取り戻した。

成果

キャッシュ・フォー・ワーク(緊急雇用創出)で収入を得た人	87人
一時滞在場所(アパートの一室)の提供	77人(同時に延べ7,240食を提供)
食料や生活必需品ボックス支援	延べ176世帯(約530人)
住宅修繕、緊急支援金、貯水タンク、家電などの支援	419世帯(約1,260人)
心のケア	114人

能登半島地震 被災者支援

石川県穴水町・七尾市・輪島市



仮設住宅に入居する住民への家電配付。

能登半島地震から1年 誰一人取り残さない支援を

2 024年1月1日、能登地方で最大震度7の大地震が発生し、多くの命と暮らしが奪われました。ADRAは、発災と同時に情報収集と支援調整を開始し、穴水町や七尾市を中心に被災者一人ひとりに寄り添う活動を続けています。

穴水町では、仮設住宅に入居する609世帯に、炊飯器や電子レンジなど、希望に応じた家電を届け、生活の再建を支えました。「待ってました!」「これでご飯がたけます」といった喜びの声が多数寄せられています。また、社会福祉協議会に寄せられる屋根のシート張りや倒壊家屋の片付けなど、特殊な技術を要する依頼にも応えられるよう、ボランティアの生活拠点や必要な工具等を整え、1件ずつ、対応してきました。2025年2月からは、社会福祉協議会が行う在宅被災者約2,800世帯の聞き取り調査にも協力し、住民の方から聞かれた声に対応する支援をつなげています。

七尾市では、足湯や移動カフェを62回実施。参加した60代の女性は、「まだこういうのやってくれてたんですね。ここもすっかり様子が変わってしまって、寂しくなって…」などと心の内をお話されたあとは、少し軽やかな様子でお帰りになりました。

2024年9月に、追い打ちをかけるように発生した能登半島豪雨によって被災した地域には、ちくちくボランティアにご協力いただいた皆さまが睡ってください、5,000枚のぞうきんを作業用として提供。ボランティアベースの整備やモバイルハウスの設置の検討を進めています。

ほかにも、断水地域への給水や子ども食堂との連携、高校へのトイレカー提供など、多方面での活動を展開しました。ADRAはこれから「誰一人取り残さない」を合言葉に、能登の人々とともに歩んでまいります。



技術系ボランティアと協力した屋根のシート張り。



避難所や仮設団地での移動カフェ。



穴水町での在宅被災者訪問。

成果

仮設住宅入居者支援	609世帯(99.5%が「満足」とアンケートで回答)
技術系ボランティアの活動	約380人
ほっとする場づくり(足湯・移動カフェ)	参加者約3,500人
トイレカーの提供	穴水高校生徒90人
お出かけ支援バス利用者	16人
在宅被災者訪問で訪問した件数	239世帯(2025年度も継続中)

医療チーム派遣事業

バグマティ州カブレランチョーク都バネバ市



少年は口唇口蓋裂の手術後、牛乳を飲んでも鼻から漏れることがなくなり、発音もきれいになったとのこと。将来、医者になる夢を抱いている。

約1,100人の笑顔を取り戻した活動に感謝をこめて

1 995年、口唇口蓋裂の無料手術を行うため、ネパールへの医療チーム派遣を開始してから30年。後半は形成外科全般を対象とする支援へと発展し、現地医療従事者の育成にも力を注いできました。この活動により笑顔を取り戻すことができた人は約1,100人。長年にわたり、本当にたくさんの医師、看護師、ボランティア、そして企業・団体・学校・個人の支援者に支えていただきましたことを心より感謝申し上げます。

近年、ネパールでは多くの医師が育ち、医療系のNGOが増えています。そのため、日本から医療チームを派遣するという形での支援活動は終了することとし、2025年2月、前回手術を受けた患者のフォローアップと、現地に保管している医療資機材の整理のため、現地を訪問しました。

協働している現地の病院で、6名の患者とその家族と再会。集まってもらったのは、口唇口蓋裂の形成手術を受けた子ども

たちです。術後の経過を確認すると、手術箇所には問題がありませんでしたが、発語に課題が残る少年がいました。発音が聞き取りにくい音を確認し、医師から発声のトレーニング方法を伝え、継続的に実施するようアドバイス。男の子は、練習を続けると力強く約束しました。診察が終わった後に楽しんだのは、口の使い方の訓練にもなる風船やシャボン玉遊び。上あごに裂け目があったときには、息を吹くという行為そのものが難しかった子どもたちが、風船を膨らませて楽しんでいる笑顔は、支援の成果を示していました。

日本から医療チームを派遣するという形での支援活動は、一区切りとなりますが、ネパールではまだ必要な医療サービスを受けられない患者さんが多くいます。今後も現地の病院と連携しながら、引き続き医療の届きにくい人々への支援を検討してまいります。



日本から来た形成外科医によって、術後の経過が良好であることが確認された。



風船で遊ぶ元口唇口蓋裂の少年。息を吹くという行為そのものが難しかった子どもたちが、風船を膨らませて楽しんでいる笑顔は、支援の成果を示している。



譲渡する医療機器のメンテナンスや使い方について、日本の臨床工学技士からネパールの病院スタッフに説明。

成果

手術を受け、笑顔を取り戻した方々	延べ約1,100人
「医療の原点に触れられる」とボランティアに参加した医療従事者	延べ約640人

GAZA, LEBANON ガザ、レバノン

人道支援



深刻な状況の中、食事の配給を受け取った男の子に、一瞬希望の光が灯った。

戦禍の中にも希望の光を

中 東の戦禍が続いています。ガザでは2025年3月の時点で5万人以上が命を落とし、人口220万人の約9割が避難を余儀なくされています。多くの人々が、今日の寝食がままならず、怪我や病気に苦しんでおり、事態は深刻です。ADRAは、命をつなぐ一助となれるよう、人道支援団体Aneraと協力し、28,000食以上の温かい食事を提供しました。

心臓病を患いながら、1年のうちに8度も避難を繰り返したアベドさんは、生活がままならないまま3人の孫を亡くしました。深い悲しみの中で届いた支援に対し、「もう限界だとあきらめて運命に身を委ねようと思う人もいるでしょう。でも私は、自分自身と子どもたちを、『前進しなければならない』と励まし続けてきました。温かい食事をありがとうございます。こうした助けがなかったら、私たちは実際どうなっていたかわかりません」と感謝の想いを伝えてくれました。

レバノンの人道危機も2024年9月末から急激に悪化し、約2,800人が亡くなり、約13,000人が負傷、国内の避難民は一時的に130万人以上にのぼりました。17歳で母親になったカディージャさんも、7か月の乳飲み子と避難しましたが、母乳が止まってしまう、パンをお茶やミルクに浸したもののしか息子に与えることができない無力感を抱えていました。

そのような中、ADRAはカディージャさんを含む、避難生活者約1,700人に、食事の提供や、食料などと交換できるカード（商品引換券）、衛生・生活用品などを配付しました。また、体を洗える環境を整え、身ざれいにすることで得られる心が安らぐ瞬間を取り戻してもらいました。辛い困難な状況にある方々が少しでも希望を感じられるよう、ADRAは今後も現地パートナーと連携し、命と尊厳を守る支援を続けてまいります。



限界だとあきらめ、運命に身を委ねようと思う人連が多い中、自分自身と子どもたちに、「前進しなければならない」と励まし続けてきたアベドさん。



2024年9月以降レバノンの人道危機は深刻化し、一時的に130万人以上が国内避難民になった。



食料の支援を受け取った17歳の母親カディージャさん（写真左）。右の少女（10歳）も2歳半（写真手前左）と7か月の妹2人を連れて、支援を受け取ったことに笑顔を受ける。

BRAZIL, PAPUA NEW GUINEA, INDIA, etc.
ブラジル、パプアニューギニア、インド、ほか

海外緊急支援



ADRAは最も被害が大きかった地域に、防水シートを届け、すべての家がさらなる被害から守られるように支援（インド）。

各国ADRA支部と迅速に対応した自然災害被災者支援

2 024年度も、世界中で豪雨や地滑りなどの自然災害が相次ぎました。ADRA Japanは各国にあるADRA支部と連携し、迅速かつ的確な緊急支援を展開しました。主な活動を報告いたします。

ブラジル：洪水被災者支援

2024年4月、リオグランデ・ド・スル州で発生した豪雨により、約228万人が被災しました。ADRAは4か所の仮設避難所の運営支援や、災害対応トレーラーを活用した洗濯や食事提供、現地ボランティアとの協働による物資配付を実施。52,000人以上に支援を届けました。

パプアニューギニア：地滑り被災者支援

2024年5月、エンガ州で大規模な地滑りが発生し、約10,000人が影響を受けました。ADRAは6月と8月に女性や

高齢者を含む約5,200人に食料や調理道具、食器、寝具、衣料、ソーラーライト、衛生用品などを配付し、多くの方の命と生活を支えることに貢献できました。

インド：洪水・地滑り被災者支援

2024年7月、ケララ州を襲った集中豪雨により6,700人以上が被災。ADRAは調理環境がなくても食べられる食品を52世帯に配付。402世帯には、約2週間分の食料を購入できる現金給付を実施しました。さらに、被災した家屋をさらなる被害から守る防水シートなどを提供し、暮らしの再建を支えました。

このほか、サイクロンによる被害のあったバングラデシュ、台風ヤギで被災したベトナム、ミャンマー、複数の台風に見舞われたフィリピンにおいても、各ADRA支部と連携し、被災者への緊急支援物資を届けました。



2024年9月にアジア地域を襲った台風11号（台風Yagi/ヤギ）によりベトナム、ラオス、タイで甚大な被害が発生。ADRAは現金給付支援などを通じて人々の緊急ニーズに対応。



パプアニューギニア。2024年5月の地滑りで10,000人以上が被災。ADRAは約5,200人へ食料・衛生用品などを支援。



2024年4月末ブラジル、リオグランデ・ド・スル州の豪雨で228万人以上が被災。ADRAは52,000人以上へ食料、衛生用品等の支援し、4つの避難所の運営にも従事。

成果

ブラジルで緊急支援を受け取った人 52,000人以上
パプアニューギニアで食料や生活必需品を受け取った人 約5,200人
インドで緊急支援を受け取った人 454世帯

成果

ガザにおける食事の提供 延べ28,000人以上
レバノンにおける食料・生活用品支援 約1,700人

ウクライナ人道支援

ウクライナ全土、スロバキア



施設で暮らす子どもたちにクリスマスギフトを手渡し。

長期化する危機の中 人々の生活と心を支える

2 022年2月に深刻化したウクライナ人道危機から3年以上。今も戦争の終息は見えず、国内避難民の数は約370万人にのぼります。ドニプロペトロウシク州やハルキウ州、キーウなどの都市でも緊急支援のニーズは依然として高く、高齢の方、障がいのある方がいる世帯を中心に、食料や生活必需品の入手が困難になっています。また、同国内では人々の精神的負担も大きくなっており、63%の世帯が、トラウマや見通しのつかない将来への不安などによるストレスからのケアが必要な、非常に深刻な状態です。

このような中、ADRAは、経済的にも環境的にも、自力での生活物資の調達に困難な世帯に、食料や衛生用品を届けました。また、経済的なサポートがあれば、自身で必要なものを購入できる地域に住む方には、現金給付を実施。「お金を受け

取ってすぐにアパートの家賃を支払いに行きました」といった声や「とても遠くにいるのに、私たちのことを親戚のように心配してくれる皆さまに心から感謝しています」といった感謝の声が寄せられています。

これらの活動に加え、電話やオンラインによるメンタルヘルス支援も開始しました。個人のカウンセリングやグループセッションを通じて、少しずつでも心の安定を取り戻せるよう取り組んでいます。参加した方からは「不安が減って、感情の浮き沈みも安定しました」「自分の感情を受け入れてあげることが大切だということが分かりました」といった声が聞かれました。

秋ごろからは、厳しい寒さを迎える同国内で、越冬に備える支援を実施。戦争被害により電力供給が安定しないことに加



衛生キットを受け取り笑顔を見せる女性。



1家族分の食料・日用品セット。ひまわり油やそばの実など、ウクライナの食卓に親しみのある食材が中心。

え、暖房費の負担が増す中で、温かく過ごしていただけるよう、国内避難民が暮らす施設15か所に固形燃料を配付。追加の現金給付も実施しました。

クリスマスには、病気を抱える子どもたちが生活する施設や国内避難民施設など10か所に、クリスマスプレゼントを届けました。同施設で1年以上治療を続けている10歳のオレンカちゃんは、プレゼントの中に入っていたお絵描きセットを見て「毎日絵を描くわ!」と目を輝かせました。その日以来、お母さんと笑顔でコミュニケーションをとることが増えたそうです。

ウクライナ国内での支援に加え、国外に避難した方々を支える活動も隣国スロバキアで継続しています。2025年1月時点で、スロバキア国内で支援を必要とする避難民の数は16万人。着の身着のまま国境を越え、言語も文化も異なる地での暮らしが突然始まり、長期化する戦争で母国に帰れぬまま現在に至るという人々も少なくありません。危機発生から3年以上が経過し、先行きが見えない不安が避難民の中にも広がって

いました。そこで私たちは、これまで運営してきた3か所の避難民ヘルプセンターにおいて、ウクライナの方がスロバキアで暮らしていくための地域社会への統合と社会心理ケアを活動の中心に据えました。

それぞれのセンターでは、スロバキア人のボランティアや地元教師などによるスロバキア語講座を開講。地元の学校の生徒をセンターに招いたり、地域のお祭りに出展してウクライナの文化紹介を行うなど、地域住民との相互理解に繋がるような機会も作り続けています。世代を超えた利用者が集まる各センターは、子どもたちが祖国の言葉や文化を育む大切な場所にもなっています。

終わらないどころか悪化している人道危機。そして減り続けている国際社会からの支援。厳しい状況が続いていますが、困難に直面しながら暮らしている人々に届ける支援は希望になります。皆さまと一丸になって、現地の方々の生きる力を支え続けたい…そんな想いを抱いています。



ウクライナ国内の避難所。屋根が割れたまま人々が暮らしていた。



燃料配付の様子。背後に写る燃料をトラックに積み込み各地へ向かう。



燃料を受け取った国内避難民センターの子どもたち。



祖国ウクライナを離れた子どもたちはこのトレンドンのヘルプセンターで母国語を学ぶ(スロバキア)。



老若男女で楽しむビンゴは参加者の心のケアにもなっている(スロバキア)。

成果

現金給付でニーズを満たすことができた女性、子ども、高齢者、障がい者など	1,475人
食料や衛生用品を受け取った人、冬の間、暖をとれるようになった国内避難民	3,811人
心のケアを受けることができた女性や戦争負傷者	延べ2,428人 (子どもを含む)
クリスマスギフトを受け取り気持ちが好転した子ども	1,200人
スロバキアで避難民ヘルプセンターを利用した人	延べ9,121人

YEMEN イエメン

国内避難民支援

ラヘジュ県、アブヤン県



園芸実習を通して節水型農業や害虫駆除を学ぶ。
※露地(ほじょう)とは、農産物を育てるための農地を指す言葉

紛争中でも自立して生活したい 農業を回復し生きる力を取り戻す

か つて中東有数の農業国だったイエメン。人口の半数以上が農業に携わっていましたが、2015年から続く内戦の影響で、多くの農地が使えなくなり、農業従事者の86%が作物生産に困難を抱えています。主な原因は灌漑設備の荒廃です。現在、国民の約3分の2が深刻な食料不安にさらされており、うち510万人は飢餓に直面する危険な状況にあります(2024年FAO報告より)。

イエメンの井戸は深く、海沿いで100メートル、高地では300~500メートルにもなります。畑を潤すだけの水を人力で汲み上げることは不可能に近く、以前は動力付きのポンプが利用されていました。しかしこの設備は一度でも壊れてしまうと、紛争が続く中での修復は非常に困難で、多くの人が農業から離れざるを得ませんでした。

そこでADRAは、エンジンや汲み上げポンプ、送水用パイプなどを提供し、灌漑設備の復旧に取り組みました。また、農

業を再開したい人々が再び自分の力で生計を立てられるよう、作物の育て方や水の節約技術、販売経路の開拓、帳簿のつけ方などを学べる研修も提供しています。支援終了後も地域の中で助け合えるよう、住民による委員会も立ち上げました。

近年は、灌漑に必要な燃料費の高騰が新たな課題となっています。そこで2024年度からは、希望する世帯にソーラーパネルを設置し、太陽光発電による水の汲み上げを支援しています。イエメンの強い日差しはソーラーとの相性が良く、環境にも家計にもやさしい取り組みです。

支援を受けた人からは、「オクラ、トマト、とうもろこし、キビ、人参が採れたよ!」と喜びの声が届いています。厳しい状況の中でも、自然の恵みと人々の立ち上がる力が、未来への希望を育んでいます。



人々の畑に再び緑が芽生える。



座学で農業トレーニングを受ける。



灌漑システムが復旧し、ソーラー発電でくみ上げた水が畑に届く。

成果

資機材の提供とトレーニングを受け、
農業を再開できた世帯

115世帯(805人)

人々が学んだ内容

農業技術、マーケット、ファーマーズ・
グループについての理解と知識

地震被災者支援

ヘラート県ジンダジャン地区およびインジル地区



食料・生活物資配付を受けた男性。
薄がいがあつたため近所の人とやって来た。

全てを奪った地震から1年 安心を礎に 復興への一歩を踏み出す

2 023年10月7日以降、アフガニスタン西部ヘラート県を襲った複数回のマグニチュード6.3規模の地震は、地域全体をがれきの山と変える壊滅的な被害をもたらしました。

ADRAはまず被災者の命を守るため、3か月分の食料、調理器具や寝具など、生活必需品を配付。その後続けて家屋建設を開始しました。地震から半年以上経っても、被災地には野宿する人や、風に吹き飛ばされかねない簡易テントで暮らす人が多くいたからです。従来の、煉瓦を積み上げただけの家屋に耐震構造を加え、人々が安心して生活できる環境を整えました。

「とても嬉しくて、感謝の言葉もありません。」そう語るのは、地震発生以降、野外で生活していたファティマさんです。日差しと風と砂埃にさらされる暮らしから、家を取り戻し、安心して眠れるようになった喜びを伝えてくれました。

さらに、地域の防災力強化にも取り組みました。村民と行政職員には防災教育を実施し、平時からの備えや災害時の行動についての知識を普及。県の国家災害管理局に勤めるバーランさん「災害に立ち向かう自信が付きました。」と語ります。災害対応を担う仕事をしながらも、防災教育を受けたのは初めてだったのです。

また、村には防災委員会と初動対応チームを設置し、有事

の際に自分たちで対応ができるよう、つるはしや一輪車、ヘルメットや安全靴などが含まれる防災ツールキットを配付。その後、洪水が発生した際には、初動対応チームが配付された道具を使って適切に排水路の整備を行うなど、地域の安全を守っています。

堅強な家と安心。防災の知識とツール。そして自信を手に入れたアフガニスタンの人々は、復興に向けて、ゆっくりと、でも確実に、一歩を踏み出しています。



兄妹、親戚計8人の子供が暮らす家。未曾有の災害から立ち直ろうとする家族の絆がある。

成果

食料・生活物資を受け取った人々	345世帯(約2,420人)
防災委員会が立ち上がり、初動対応チームが結成	9村 45チーム
家屋支援を受け以前より安全に暮らせるようになった家族	88世帯(約620人)
防災教育を受けた人	596人



文中で紹介したファティマさん。真っ青な空に真っ白な家。笑顔が輝く。



防災研修でテストに取り組む女性。



防災ツールキットを配付。地震や洪水など様々な自然災害が発生するこの地域。自らの手で大切なものを守る体制を整える。

ZIMBABWE ジンバブエ

住民参加型 学校開発支援

西マシヨナランド州ニヤミニヤミ地区



事業で建設された教室で、児童と交流するスタッフの上田。

皆で支える子どもたちの教育と未来

ニヤミニヤミ地区では一部の学校に校舎がなく、子どもたちは屋外での学習を余儀なくされていました。雨が降ると授業は中断され、十分に学べません。経済的な理由で通えない子もいます。しかし「教育はすべての子どもの権利」です。ADRAは、子どもたちが安心して学べる環境を、学校と保護者、地域住民が協力して築けるよう支援活動を続けています。

マレンベジャ小学校、サウィラマカンデ小学校、マジヤソ小学校の3校では、校舎はすでに完成し、子どもたちが意欲的に学ぶ姿が見られるようになりました。2024年度は、職員棟を新しく建設。教師用の机と椅子も配備し、よりよい授業の準備ができる環境が整いました。また、学校開発委員会を対象とした研修や保護者を交えた教育相談会を通じて、地域全体で子どもたちの就学を支える体制が少しずつ築かれています。

学校に通えていなかった子どもたちのためには特別教室も開講。復学・就学を支えています。

昨年に、パナソニックグループ様のご協力でソーラーランタンを受け取った子どもたちへの事後調査を行うと、電源がなかった家庭では夜に明かりが灯るようになり、全員が夜間学習をすることが可能になりました。9割の生徒は成績が上がり、高校進学や将来の夢など、未来への期待を膨らませています。

花王ハートポケット倶楽部ならびに花王株式会社様からは、制服や啓発教材の配付、女子への生理用品の配付をサポートいただきました。また、フェリシモ様のご寄付により、1校で給食の提供をスタートしました。給食により、学校の出席率が上がり、教育の機会を守ることができています。



新しく建設された校舎で楽しく学ぶ児童。



花王ハートポケット倶楽部・花王株式会社様の生理用品のご寄付により月経時も通学できるようになった女子生徒。



フェリシモ地球村の基金・株式会社フェリシモ様のご支援で、栄養のある給食を食べる児童。調理等は保護者ボランティアが進んで行っている。

成果

生理用ナプキンを受け取った女子児童

900人

学校で給食を食べられるようになった児童

約230人
(マレンベジャ小学校)

特別教室で9か月間学ぶことができた不就学児童

90人

学校の環境が整い、全国統一の小学校卒業試験学校として認定。他校に受験に行かなくて済むようになった

NEPAL ネパール

スポンサーシップ

バグマティ州カブレランチョーク郡



キラキラ輝いた目で熱心に授業を受ける子どもたち。

教育を通じて広がる子どもたちの可能性

冊の教科書や一着の制服が、子どもたちの未来を大きく変えることがあります。経済的な理由で学び続けられない子どもたちが、安心して学校に通えるように、2024年度は100人の子どもたちに学資支援を届けました。

ネパールでは、経済発展や教育制度改革により、12年生(日本の高校3年生に相当)まで修了することで、就職や進学の機会が大きく広がるようになりました。しかしその一方で、貧困や社会的な慣習、家庭の事情などにより、学びを断念せざるを得ない子どもたちも少なくありません。

こうした状況に対応するため、ADRAでは1年生から12年生までを対象に、制服や学用品を提供し、特に9年生以上には毎月の学費を支援することで、子どもたちが学び続けられるよう環境を整えています。

家庭の経済状況が悪くなった9年生の頃から支援を受け、今では国の奨学金を得て医科大学に通うアンジャンさんは、スポンサーシップによって学び続けられた経験が大きな励みになったと話してくれました。そして、「卒業して外科医になったあとは、今まで支援してくれた同親にまず感謝し、新しい家を立てたいと考えています。また経済的に余裕がでたあと、海外、特にアメリカやヨーロッパで修士号を取得したいです。最終的には、自分が生まれたこのネパールで骨をうずめる気持ちで、自分の病院を建て、社会に貢献したいです」と夢を語ります。

スポンサーとして継続的に支えてくださっている皆さまには、年2回の現地からの報告と、クリスマスカードをお届けすることができました。今後も、支援者の皆さまと連携して、夢に向かって進む子どもたちを一人ずつでも増やせるよう取り組んでまいります。



事業部長の杉本(右奥)と一緒に授業の前のご挨拶。



子どもたちから支援者に贈られたクリスマスカード。



9年生の頃からナマステ基金の支援を受け、今では国の奨学金を得て医科大学に通うアンジャンさん。

成果

学資支援

6校100人

紛争危機および 干ばつ対応水衛生支援

アフール州内3つの国内避難民(IDP)キャンプ



給水車から水を受け取る状況を確認するADRA Japanスタッフ(中央)。

食料や水へのアクセス改善 人々の命と尊厳を守るために

北 部紛争やソマリ州との民族衝突により、アフール州では20万人以上が国内避難民となっています。さらにエルニーニョ現象による干ばつで食料の確保が難しく、子どもの4.3%が重度の急性栄養失調状態にあるなど、状況は深刻です。水衛生も課題で、地下水の枯渇やポンプの故障に加え、度重なる洪水や干ばつにより衛生環境が悪化し、同州では2024年4月に730件のコレラ感染も確認されています。

ADRAはまず、もっとも支援が必要とされているヤングディセンター、ロト、ケレルの3地域で小麦粉、食用油、レンズ豆といった基本的な食料を配るため、事前に市場調査を実施。300世帯の食を支えられるように手配しています。もともと遊牧民で、避難の過程ですべての資産を失ってしまったという方は、「3か月以上食料支援が受けられず、ラマダン(断食月)を過

ぎても厳しい状況でした。今回、支援を受けられると知り希望が見えました。心から感謝しています」と話しました。

また、水へのアクセスを改善するため、壊れていた井戸を検査したところ、1日あたり約3万リットルの水を確保できる見通しが立ちました。政府による給水トラックに依存していた人々が今後安定して水を使えるように、設備の修繕を進めます。

公衆トイレがなく衛生環境が悪化していたキャンプでは、住民との話し合いを重ね、誰もが使いやすい男女別・障がい者対応型の共用トイレの建設を準備中です。

衛生意識の向上にも力を入れています。地域の保健事務局と連携し、12人の住民代表らに対して衛生研修を実施。手洗いなどの日常的な衛生習慣などの知識をコミュニティ全体へ広める啓発キャンペーンの計画も始まっています。



食料配付を届ける世界を運営。わかりやすくリストを提示。



約1,000世帯の国内避難民が生活するキャンプ。



壊れた井戸の出力検査を実施し水が出ることを確認。

平和的共存促進および 水衛生支援

ガンベラ州イタン郡



ピースダイアログで発言する女性。
2025年3月までに4度開催され平和について話し合った。

難民と地域住民がともに暮らす地域に農業 水 そして平和を

エ チオピア西部に位置するガンベラ州イタン郡では、隣国・南スーダンから多くの難民が流入しており、政府による統合政策の下、地域住民とともに生活しています。しかし、難民の経済活動は限定的で生活は困窮。加えて、同地域に共存する3つの民族は長年緊張関係にあり、数年前に武力衝突が起こるなど、平和の実現には多くの課題が残されています。近年は、急激な物価上昇や国際援助の減少が難民と地域住民の両方の生計を直撃。暮らしがさらに圧迫され、地域の平和が脅かされる要因となっています。

このような背景のもと、ADRAは「食料安全保障の向上」と「平和的共存の促進」を二本柱に活動に取り組みました。雨水に頼る農業が中心のこの地域では、肥沃な土壌が十分に活かされていないため、乾季にも水を供給できるポンプ式井戸

を備えた農地を整備。住民と難民が共同で使用できるようにしています。さらに、両者が地域の農業課題に自ら対応できるよう、研修と計画策定を進めました。並行して、住民や難民が「平和とは何か」を話し合いながら、独自の平和の指標を作成し、ピースダイアログ(平和に向けた対話)を実施。参加者からは、「農業活動やピースダイアログに実践的に取り組めたことが、将来における私たちの力になりそうです」と力強いコメントが聞かれています。

また、地域で唯一難民を受け入れているマコッド中等教育学校では、森村豊明会長の支援により、トイレの水道を使うようにし、生徒で構成される水衛生クラブを中心に、研修や清掃、啓発活動を展開。その結果、伝染病等が減り、保護者など周囲の大人たちにも衛生習慣が広がっています。



灌漑のための井戸整備。水が勢いよく吹き出し笑顔がこぼれる。



「自分たちにとって平和とは何か」をテーマに住民会らが意見を出し投票。



手洗いの講習を受ける参加者。

成果

開墾された農地

2ヘクタール

ピースダイアログに参加し平和的共存の理解を深めた人

400名

衛生意識が向上した人々

計233人

(マコッド中等教育学校生徒・教師、近隣住民)

成果

衛生研修により、健康を守る知識を伝える準備が整った人

12人

井戸の修繕により水へのアクセスができるようになる人

約4,000人

食料支援を受け取る予定の人

300世帯

※食料支援の配付は2025年度に計画

(1,710人:子どもを含む男性819人、女性891人、うち障害のある方16人)

国内避難民支援

シャン州



およそ1か月分の食料を購入するための現金を各世帯に給付。

紛争下 長引く避難生活を送る方に生きる力を

ミャンマーでは、2021年の政変を機に国内で武力衝突が激化し、多くの人々が住む家を追われ避難民となっています。その数は2025年3月現在で350万人。国民のおよそ15人に1人の割合です。この中には、農作業から帰宅する途中で自分の村が焼かれているのを目の当たりにし、幼い子を連れてすぐさま逃げた人もいれば、安全な場所を求めて森をさまよひ、ようやく仮設の避難所にたどり着いた人もいます。避難先の多くは、教会や僧院、民家の軒先などで、プライバシーの確保が難しく、生活用水やトイレなどを地元の人々と共用する不安定な環境です。さらに、紛争の危険が避難所に迫ることもあり、再び移動を余儀なくされるケースもあります。安定した職につくこともできず、十分な食料を得られない厳しい状況下で、終わりの見えない避難生活は、人々を心身ともに追い詰めています。

こうした状況を受けて、ADRAは避難民が多く身を寄せているシャン州で、家族が1か月分の食料を確保するための現金給付や、石鹸、洗濯用洗剤、生理用品などの衛生キットを配付しました。また、避難地区の村から選抜した人材を衛生啓発員として育成し、彼らが主体となって、病気の感染経路や予防方法、手洗いの重要性などを伝える活動を行い、限られた環境の中でも健康を守る知識や実践方法を広めることができました。ある方は、「十分な食料も物資もない大変な時期を何とか乗り切ることができました。私たちのことを気にかけてくれる人たちがいてくれるのだと知り、勇気づけられました」と、ほっとした表情で語ってくれました。平和を求めて家から遠く離れて暮らす方、一人ひとりが1日でも早く平穏な日々を取り戻せるように願っています。



長引く避難生活でも楽に生活できるよう、石鹸、洗剤、生理用品などを配付。



住民や避難民の代表者を衛生普及員として育成。研修を受けた衛生普及員が、近隣の人々に衛生管理や感染予防の方法について指導できるようになった。



事後調査。給付された現金や衛生用品が生活改善に役立っていることが確認された。

栄養・水衛生支援

ルンビニ州バルディヤ郡



ビジャヤナガル村にて高架水槽を導入し、新しく設置した水栓から水が出るようになった。

「きれいな水を飲みたい」「健康でいたい」という住民の夢が実現

ネパール中西部に位置するルンビニ州バルディヤ郡は、伝統的な習慣が色濃く残り、開発の遅れが指摘される地域です。栄養や水衛生に関する指標は全国平均を大きく下回り、州内でも特に改善が急がれる状況にあります。そのためADRAは、行政の能力強化、医療施設環境の改善、住民への啓発など、多角的なアプローチを通じて、特に5歳未満の子どもたちの栄養状態向上に取り組んでいます。

栄養・水衛生支援2年目となる2024年度は、1年目の成果を発展させ、郡内8つの自治体すべてにおいて、行政機関からコミュニティの住民グループに至るまで、それぞれの状況や役割に応じて、研修や啓発活動を展開しました。住民の栄養や健康を守る関連施設は、以前より質の高いサービスを提供できるようになり、人々の意識も高まったため、利用者の増加と健康状態の

向上が期待されています。また、新たに設置した高架水槽によって、安全な水が、コミュニティ全体に行きわたるようになりました。ビジャヤナガル村の住民は、「これまで水質が確保されていない手押しポンプの井戸に頼っていましたが、今は安全な水を得られるので病気にかかる頻度が減るでしょう」と語っています。

2023年度に浄水装置を設置したコミュニティでは、水衛生委員会による維持管理体制確立にはまだ課題が残るものの、住民が水のおいしさを実感するようになりました。浄化された水が住民の日々の生活において重要な役割を果たすようになっていきます。

安全な水と栄養の改善は、命と未来を守る基盤です。ADRAは、住民の声に耳を傾けながら、地域の健康と希望を支える歩みを続けています。



地域保健ボランティアにより、各地域の母親へ正しい知識を啓発。



ヤマハ浄水装置を設置したダクラ村の住民に聞き取りを実施するスタッフの連泊(右)。



自治体職員や医療従事者が中心となり、水衛生・栄養の大切さを周知しながら市街を行進。

成果

食料調達のための現金給付を受けとった世帯	1,900世帯(約7,800人)
食料状況が改善した世帯	58世帯(237人)
衛生管理の知識が向上し、生活に取り入れている世帯	280世帯(約1,200人)
適切な時に手洗いを実践できるようになった世帯	246世帯(約1,000人)

成果

自治体職員への研修	8自治体、約150人
栄養ケアセンターの改修・改善、栄養コーナーの新設	6か所
高架水槽による安全な水の確保	ビジャヤナガル村の住民全体
子どもの命を守るオリエンテーションを受けた母親	18,351人

MONGOLIA モンゴル

農牧業による 生活向上支援

セレンゲ県(羊毛)、ダルハン・オール県(羊毛)、バヤン・ウルギー県(農業)



人工授精等の技術支援による羊の繁殖。オーストラリアの専門家による指導を受けて、毛質の柔らかい子羊が誕生。

持続可能な牧畜と温室を導入した農業で 未来の暮らしをつなぐ

モンゴルでは、過放牧による草原の荒廃や土地の砂漠化、気候変動の影響が深刻化しています。特に羊毛生産や農業に従事する家庭は、従来の知識や手法だけでは生計を維持することが難しい状況です。

こうした状況に対応するため、ADRAは2つの取り組みを通じて生計向上支援に取り組みました。1つ目は、上質で柔らかい羊毛が取れるオーストラリア産羊の遺伝資源を活用した「ファイン・ウール羊繁殖プロジェクト」です。2024年は人工授精によって249頭の子羊が生まれました。また羊毛の価値を損なわないために、ニュージーランドから専門家を招き、羊飼いを対象に毛刈り技術の研修を実施しました。

2つ目は、気候に左右されにくい野菜栽培と栄養改善を組み合わせた農業支援です。生産面では、小規模農家が太陽熱

を利用したパッシブソーラー温室を導入し、寒冷地でも長期間にわたって野菜を栽培できるように支援しました。一方、栄養価を損なわない調理法や、干し野菜・漬物・瓶詰めなどの保存方法を学ぶ研修を、一般家庭を対象に実施しました。家庭で栄養バランスの取れた食事がとれるようになっただけでなく、余剰分を販売することで収入向上にもつながっています。

地域住民のミルザバイさんは「年を追うごとに土が良くなり、収穫も増えているので、近所の人にも『やってみよう』と声をかけています。野菜が育てるのは楽しいだけでなく、特に私のような仕事の少ない人にとっては大切な収入源になります」と話しています。

今後は人工授精による繁殖結果の観測と、農業分野における地域販売ネットワークの確立を進めていきます。



輸入した精液と胚を使って人工授精と胚移植を実施。上質で柔らかい毛を持つファイン・ウール羊が育ち、質の高い羊毛が採れるようになった。



温室栽培を取り入れた野菜の栽培指導。従来牧畜に頼ってきた地域での食料事情と栄養状態を改善。



野菜を使った調理実習。野菜食の習慣のない住民が保存食の作り方や栄養価の高いレシピを学んだ。

JAPAN 日本

防災・減災活動

日本全国



宮城県山元町の沿岸部地域の方との話し合い。

備えは平時から 地域の防災・減災力向上をめざして

近年、日本では毎年のように自然災害が発生しています。ADRAは「地域の防災・減災力」の向上を目指し、防災・減災に関する講座の実施や、過去に被災した地域との話し合い、首都直下地震に備えた関係各所との連携などに取り組んでいます。

災害時には、住民、行政、社会福祉協議会(社協)、NPO、ボランティアなど、多様な立場の人々との連携が不可欠です。そのためには、それぞれが知識と意識を持ち、平時から顔の見えるつながりを築いておくことが大切です。ADRAは住民の方々が自らの命と生活を守るよう働きかけ、地域での助け合いが叶う社会づくりを進めています。2024年度は、社協や学校などから依頼を受け、防災・減災に関する講座や訓練、能登半島地震の事例報告など計12回実施し、678人のご参加がありました。

大学生からは、「ボランティアの意見も取り入れて活動に反映していくことを初めて知った。今後も災害は起こりうるため、福祉の勉強や就職して現場に出た際に今回の学びを生かしていきたい」などの感想をもらっています。小学校での授業では、「一人ひとりに何ができるかを考えてもらったところ、真剣に考える様子が見られ、『ボランティアで来てくれた人たちを手伝ったりする』といったアイデアがあがりました。

災害後の復興を支える活動としては、2023年に台風2号の被害を受けた茨城県取手市と、東日本大震災からつながりのある宮城県山元町において、コミュニティ支援を継続しています。山元町では、ADRAが行うウクライナ人道支援とのコラボ企画が実現し、山元町の「やまもとひまわり祭り」の一角で、ウクライナの方々に希望を届けるひまわりが咲き誇りました。



茨城県、しほりボランティアセンターと協働して行った講座。



やまもとひまわり祭りにてウクライナ人道支援につながるアドラ旗を配置。



取手市双葉地区で三育学院中等教育学校の生徒によるミニコンサート。

成果

防災・減災講座や研修を開催した学校や団体	12機関
災害の影響と備えを学び、防災・減災の意識を高めた人	678人
研修やイベントに参加した取手市双葉地区の住民	延べ120人

成果

人工授精で生まれた子羊	249頭
人工授精した羊	680頭
参画した牧畜世帯数	103世帯
農業研修、並びに太陽熱を利用する「パッシブソーラー温室」建設研修参加者	107人

一人ひとりの参加でふくらむ未来への希望

東京マラソン2025チャリティで つながる輪

寄付先団体として2度目の参加となった東京マラソン2025チャリティでは、世界中から多くの方が温かな想いとともADRAを寄付先に選んでくださいました。チャリティランナーさんからは、「かつて井戸掘りボランティアに参加しました。地域のひとと活動する姿が印象的でした」「祖国で教育支援をしてっていると知りました。私は都会育ちで、同じ国で苦労している子どもがいることを知りませんでした。支援活動に感謝しています」などの声があり、共感の輪の広がりを感じます。集まったご寄付は9,911,000円(前年度の約2.4倍)。アフガニスタンでのシェルター建設、ウクライナやミャンマーでの食料・衛生用品の配付、ネパールでの子どもの教育や水の支援などに役立てられました。

足の怪我を乗り越え、1年越しの参加となったドリーさん。「東京をADRAのために走れて光栄です」と話す。当日は3時間43分の好タイムでゴール!



フィニッシュ後に記念撮影。チャリティの想いをついに走ってくださったタイからのランナーの皆さま。

刺激と成長を 夏のインターン

夏に3名の大学生を、コミュニケーションチームのインターンとして受け入れました。「自分に何ができるのか知りたい」「行動できない人の背中を押したい」「将来、世界の現状を伝えられる教師になりたい」など、それぞれの期待を胸に集まったメンバーです。一人ひとりの興味関心と、お願いしたい業務をマッチング。ウクライナ越冬支援やジンバブエ教育支援、寄付者との関係作りなどに、協力して携わっていただく中、学び、考え、実践する姿勢が互いの刺激と成長につながりました。



水害発生時には、支援物資のぞうきん発送作業でも活躍。

岡山パネル展～巡回開催～

岡山県在住の支援者さまの多大なるご協力のもと、「国際NGOの活動を通してみる世界～災害と向き合う～」と題し、岡山市内4か所の公民館でパネル展を開催しました(4月～7月)。展示では、日本を含む世界12か国で行っている支援活動を、写真と解説を通してご紹介。各パネルには、実際に現場で聞かれた声を盛り込んで掲示し、マスメディアだけでは伝わりにくい現場の実情を伝えました。訪れた方々にとって、遠い国の出来事を身近に感じ、自分にできることに想いを向けていただける機会となりました。



パネル展の様子。

国際協力の現場の声を届ける 学校への講師派遣・セミナー登壇

人道支援の現場では、「支援する側による搾取やハラスメントを決して許さない」という意識が大切です。ADRAは、2024年度もPSEAH(性的搾取・虐待およびセクシャルハラスメントからの保護)に関する講演や研修の依頼を多く受け、重要な認識を広げることにつながりました。

また、国際協力への理解を深め、共感を育むために、幼稚園・保育園から大学までの各教育機関にスタッフを講師として派遣し、啓発に努めています。「ニュースだけでは身近に感じられませんでした。今日、現場の話やエピソードを聞いたのは貴重な体験でした」など、国際問題がより身近になったという感想が多く届いています。高校生や大学生からは個別でお問い合わせいただくこともあり、オンラインや対面にて国際協力の現場について丁寧にお伝えしました。



少人数の授業の際は、パソコンの画面を近くまで寄せて、一緒に国際協力について考える機会をもった。

「知る・考える・備える」を共に 報告会・イベント

多くの方に活動を知っていただくために、報告会やイベントの機会をもっています。6月27日には、オンライン報告会「能登地震のリアルと希望～今後につなげたい地域の受援力・調整力～」を開催。60名が参加する中、能登半島地震から半年のタイミングで、支援現場で直面した課題や、行政・民間・地域が連携して動いた具体的な事例をお伝えし、これからの支援について共に考えることができました。

9月14日にはセブンスデー・アドベンチスト亀甲山キリスト教会を会場に、「防災(食)食セミナー」を開催し、ADRAが災害備蓄に推奨する「菜食」をベースとした防災食を参加者と一緒に調理・試食しました。アルファ米ピラフや切り干し大根サラダなど、非常時にも体調に配慮できる食事の備えについてご紹介しました。「フライパンと少しの水でおいしく短時間で簡単にできると知って、ほんとによかった」など、たくさんの感想をいただきました。



菜食の防災食をつくることで、体調に配慮ができることを紹介した。

外部のイベントにも参加し、9月28、29日には5年ぶりにグローバルフェスタへ出展しました。新宿会場にて「ネパール駐在員おすすめのアート」や支援国クイズ、難民体験ワークショップなどを通じ、来場者と直接交流。学生から一般の方まで多く立ち寄ってくださり、ADRAの活動への関心や応援を呼びかける良い機会となりました。



各支援国の4択クイズを出し、来場者に国際協力について考えるきっかけを提供した。

事業名	事業実施概要	実施期間	実施場所	従事人数	受益対象者の範囲及び人数	支出額(千円)	助成団体及び助成期間
開発途上国における支那の必要となる人々の開発支援事業							
ネパール 区画チーム 派遣事業	シア・メモリアル・アドベンチスト病院で、医療器材や備品を整理。患者6名と再会した。	2024/4 ～ 2025/3	ネパール	2人	無	687	
ネパール スポンサーシップ事業	経済的事象により進学困難な生徒への学費支援。支援者にはクリスマスカードと子どもの様子を伝えるレターを届けた。	通年	カブレラン チューク郡	2人	学費支援:6校100人	4,254	
ネパール 水衛生と栄養事業	5歳未満の乳幼児を中心とした栄養状態を改善。また水衛生施設と高気圧槽を導入し、水衛生環境を整え、包括的なアプローチにより、総合的に住民の健康状態の改善をする(2年次、3年次)。	2023/3 ～ 2026/2	ネパール バルディヤ郡	4人	(事業2期) *ガバナンス強化:258人 *インフラ整備:6 NCC施設および8自治体の住民 *キャパシティビルディング:9研修対象20,762人 *啓発活動・キャンペーン参加者343人	66,648	日本NGO連携推進委員会協力 2024/3/1～2025/2/28 「バルディヤ郡の栄養状態と水衛生環境の向上を通じた健康改善事業(2年次)」 2025/3/1～2026/2/28 「バルディヤ郡の栄養状態と水衛生環境の向上を通じた健康改善事業(3年次)」
ジンバブエ 教育環境改善事業	学校に通っている子、通っていない子に関わらず、それぞれにあった形で教育を受けることができるように、3校に2教室の校舎1棟、職員棟を建設した。また、学校運営、教育普及、特別学校の開設をした。(3年次)。	2017/3 ～ 2025/3	西マショラン ランド州ニヤミ ニヤミ地区	4人	【ニヤミニヤミ地区】 *生徒:1,122人 *教員:約20人 *学校関係者:60人 *建設作業参加者:90人 *保護者・家族:3,366人	103,492	日本NGO連携推進委員会協力 2024/3/31～2025/3/30 「ジンバブエ住民参加型学校開発事業」(3年次) パナソニック・無電化地域の未来を創るプロジェクト～LIGHT UP THE FUTURE～ 花王ハートポケット倶楽部 フェリシモ 地球村の基金
エチオピア 生活上と平和的共存促進事業	住民と難民の食料安全保障向上と平和的共存促進を支援。灌漑設備で農地を整備。乾季に水を供給できるポンプ式井戸を導入した農地の整備を進めた。また、住民や難民が主体的に平和を定義する目標の作成や、住民が平和について話し合うピース・ダイアログを実施した。また、地域で唯一難民を受け入れているマコッド包摂中等学校で水衛生環境を改善。	2024/3 ～ 2025/6	エチオピア ガンベラ州イ タン郡	4人	【N連・イタン郡】約470人 【森村豊明会・中学校】437人	36,815	日本NGO連携推進委員会協力 2024/3/1～2025/6/30 「ガンベラ州イタン郡ホストコミュニティおよび難民の生計向上および平和的共存促進事業」 公益財団法人森村豊明会 2023/10/1～2024/9/30 「エチオピア国ガンベラ州イタン郡マコッド包摂中等学校における水衛生環境改善支援」
モンゴル 生活上支援	貧困家庭の収入向上につながる畜産事業。上質羊毛の羊育成	2022 ～ 2026	モンゴル	2人	【羊毛】約400人、 2組織 【畜産事業】 直接受益者:約1,130人 間接受益者:46,000人	12,066	
事業形成・評価事業	新事業形成: パングラフッシュで調査を実施後、水衛生環境改善および農業の案件形成中。 タイ国境の難民キャンプにいるミャンマー難民の教育支援事業の案件を形成中。	通年		3人		5,814	
小規模支援事業	小規模な事業を支援	随時		2人		120	
国内外の自然災害、紛争及び戦争による被災民や難民等への緊急支援事業、復興支援及び防災・減災事業							
エチオピア 国内避難民支援事業	エチオピア北部の紛争後、食糧及び水と衛生のための生活用品の提供、給水施設の修繕及び適切な衛生知識普及を実施している。	2024/11 ～ 2025/6	エチオピア アフール州	4人	*給水施設の整備:約4,000人 *衛生意識の啓発研修:12人	9,871	ジャパン・プラットフォーム 2024/11/30～2025/6/30 「エチオピア・アフール州紛争危機及び干ばつ対応水衛生支援」
ウクライナ 人道支援	ロシアの攻撃により避難している人々に対して、物資(食糧、NFI、医薬品など)及び現金を配布。心のケアなども実施	2022/2 ～ 2025/3	ウクライナ全土、 スロバキア などの周辺国	6人	ウクライナ国内避難民 *現金給付:1,475人 *食料・NFI:約2,500人 *メンタルヘルス:3,628人	167,603	ジャパン・プラットフォーム 2024/3/28～2025/1/31「ウクライナ国内の戦争被災者のための緊急生活支援事業」(4期) 2025/1/21～2025/6/30 「ウクライナ被災地の医療費のための緊急支援事業」(5期)
イエメン 国内避難民支援事業	長年の紛争により破壊された灌漑システムを復旧させ、自らの農業の営みを再開できる状態にまで回復させ、持続的な生計能力と農業生産力の基盤を再構築する。	2022/9 ～ 2025/3	イエメン ラヘジュ県、 アブヤン県	4人	*灌漑システム修復:805人 *研修:115人	69,108	ジャパン・プラットフォーム 2024/3/28～2024/12/31 (4期) 2025/12/1～2025/6/30 (5期) 「イエメン共和国ラヘジュ県とアブヤン県における緊急農業復興支援事業」
ミャンマー 国内避難民支援事業	国内紛争により多くの避難民が発生し、帰還の日が立たない状況の中、食料を調達するための現金給付および身の回りを改善するための衛生物資を提供した。また、2024年9月に東南アジア一帯に甚大な被害をもたらした超大型台風「ヤギ」は、ミャンマー全土にも壊滅的な被害をもたらした。緊急対応した。	2023/7 ～ 2025/3	ミャンマー シャン州	4人	国内避難民(JPF3) 食糧配布:7,796人 衛生物資・研修:1,205人	81,584	ジャパン・プラットフォーム 2024/3/26～2025/2/28 「シャン州北部における食糧安全保障と衛生普及活動」(3期) 2025/1/10～2025/7/9 「ミャンマー・シャン州南部における洪水被災者の生活再建のための現金給付」(Yagi) 2025/1/10～2025/7/10 「シャン州紛争被害者のための現金給付と衛生普及活動」(4期)

事業名	事業実施概要	実施期間	実施場所	従事人数	受益対象者の範囲及び人数	支出額(千円)	助成団体及び助成期間
アフガニスタン 国内避難民支援事業	アフガニスタン全土で人道危機が生じている中、2023年10月7日以降、アフガニスタン西部ヘラート県を襲った複数のM6.3規模の地震は、地域に壊滅的な被害をもたらした。人々は生計手段や家を喪失し、基本的な食料や生活用品の確保が難しく、住む場所もなくなった。	2023/11 ～ 2025/3	アフガニスタン ヘラート県	4人	*食料・生活物資:2,415人 *家庭支援:616人 *防災教育:596人	82,676	ジャパン・プラットフォーム 2023/11/1～2024/5/31 「アフガニスタン・ヘラート県における地震被災者への緊急食料及び越冬支援」 2024/3/31～2024/12/31「アフガニスタン・ヘラート県における地震被災者シェルター及びDRR(Disaster Risk Reduction)支援」(1期) 2024/12/1～2025/3/31 「アフガニスタン・ヘラート県における地震被災者シェルター及びDRR(Disaster Risk Reduction)支援」(2期)
日本 東日本大震災復興支援、 防災・減災事業	東日本大震災における経験を踏まえ、国内の自然災害被災者支援に即時に対応できる防災の体制づくりのための活動。平時から顔が見える繋がりを作り、各機関との連携を図り、ネットワークを広げ、積極的の実施した。また東日本大震災事業のフォローアップも行った。	通年	全国各地	5人	【被災防災】 *防災減災講座:12回 *防災減災講座参加者:678人 【自治体】 *山形市との関係維持 *静岡県浜松市との関係を深める	5,194	
日本 国内災害対応事業	【令和5年台風2号】 茨城県取手市の被害から続けて被災者支援を行った。	2024/4 ～ 2025/3	日本各地	5人	【取手市被災地区】 *ボランティア研修:40人 *クリスマス会参加者70人 *クリスマスコンサート参加者50人	236	
日本 岐阜県高山市被災者支援事業	2024年1月1日に、岐阜県でM7.6の大規模な地震が発生。インフラ被害が大きく、2月に支援活動を開始して以降、被災者が安心した生活を送れるように、行政や現地で活動するNPOやボランティアなどと協働し、多角的な視点で課題解決に取り組んでいる。	2024/1 ～ 2025/3	石川県 六水市 七尾市	5人	【六水町】 *六水町仮設住宅:609世帯 *仮設物件:約380件 *足湯・移動カフェ:267人 *お出かけ支援バス:16人 *在宅被災者訪問:239世帯 *トイレカー利用者:90人 【七尾市】 *足湯・移動カフェ:3225人	88,227	ジャパン・プラットフォーム 2024/3/20～2024/11/30 「六水町生活再建支援事業」
緊急支援事業の 調査、資金支援等	世界各地で発生した自然災害の被災者支援に際してはADRAネットワークを通して資金支援を行った。	通年	その他	4人	*ガナ(1,565,800円) *台湾(5,161,302円) *ブラジル洪水(523,148円) *PNG地すべり(875,483円) *インド洪水(218,640円) *ルングラ洪水(305,348円) *ネパール地震(103,880円) *ベトナム台風(308,680円) *インド地すべり(521,668円) *レバノン危機(621,820円) *その他(791,129円)	10,797	
国際協力を通じた学生・社会人に対する国際人としての人材育成事業							
インターン受入	インターンを受入れ、事務作業やイベント運営等を通じ、国際協力の仕事に対する理解を深めてもらった。	通年	日本	4人	インターン:6人	1,170	
講師派遣	高校や大学、及び講演会等に講師としてスタッフを派遣。オンライン及び学校訪問で講演している。特にPSEAH(性的搾取・虐待およびセクシャルハラスメントからの保護)に関する講師派遣は多かった。	通年	日本	9人	高校・大学・講演会等:11回(354人)	133	
各国政府、国際機関、及び関係団体との情報交換、連絡調整、協力及び人材の派遣							
関係団体との連携	JPF、JFUN、GR/IDI、JHINEといったNGOのネットワークに参加し、情報交換、事業間の調整等を行った。ほとんどの会議はオンライン開催である。	通年	日本	10人		38	
国際協力に関する日本の社会への啓発と広報事業							
イベントへの参加	グローバルフェスタJAPAN2024のイベントに出展。	通年	日本国内	10人	ADRAブース来場者(88人)	506	
事業報告会	オンラインでの事業報告のほか、各地のSDA親会で事業報告を実施した。	通年	日本国内	6人	全国各地:31回(3,025人) オンラインイベント開催2回	1,118	
小・中学校訪問、 受け入れ	教育機関向けの国際理解・平和教育等の講演を行う。学校訪問およびオンライン実施。	通年	日本国内	6人	こども園・保育園・幼稚園・小学校・中学校、他:7回(648人)	506	



企業との連携

社会貢献活動におけるパートナーとして信頼をお寄せいただいている企業・団体様をご紹介します。(順不同・敬称略)

株式会社ファーストリテイリング

ユニクロやジーユーを展開する株式会社ファーストリテイリング様より、2023年度のご支援に続き2024年度も能登半島被災者支援にご寄付をいただきました。被災地域に暮らす従業員の方のために行われた社内基金の一部を、さらに広く被災地全体への支援に役立てられるよう、ADRAを通じた支援活動のためにお寄せくださったのです。長期的な復興が必要となる能登の方々への深い思いやりと、全社をあげて助け合いの精神を大切にされている姿勢に、心より敬意と感謝を申し上げます。



株式会社ジャパンテクニカルソフトウェア

システム開発を通じて社会に貢献するジャパンテクニカルソフトウェア様より、ウクライナの人道危機に対して4年連続でご寄付をいただきました。2024年には、ウクライナからスロバキアに避難中の子どもたちへ日本からの贈り物を届ける企画にもご賛同してくださり、社員の皆さまで、バタバタと折り紙の鶴を折って、心の通う支援にもご参加いただきました。社内報告会も開催してくださり、思いを共有していただいたことに心から感謝申し上げます。



LINEヤフー株式会社 (Yahoo! ネット募金)

オンライン寄付プラットフォーム「Yahoo! ネット募金」は、社会課題の解決に取り組むADRAのような支援活動に取り組む団体と支援したい個人をつなぐ役割を果たしています。2024年度は特に、台湾における地震、ウクライナにおける紛争、アジア各国における洪水などにおいて活用させていただきました。また、支援活動への募金について、メールマガジン等で活発に情報発信をしていただきました。寄付への積極的な呼びかけが、多くの人々の命と暮らしを支える力になっています。



住友ファーマ労働組合

住友ファーマ労働組合様は、能登半島地震の発災後、社員募金のご相談をいち早くいただき、ADRAでは専用の募金ページを開設させていただきました。また集まった募金に対するマッチング寄付のほか、全国の幹部が集まる集会を石川県で開催される折にぜひ現地でも力になれることがあればと、穴水町でのボランティアにも参加してくださいました。暑い中、食庫の片付けをお手伝いいただき、地域の復興が支えられています。

住友ファーマ労働組合

ジョンソンコントロールズ株式会社

ジョンソンコントロールズ株式会社様は、2023年より会社としてADRAの「ちくちくボランティア」に継続的にご参加くださり、水害被災者支援に備えるための備中づくりに取り組んでいただいています。また同社には、社員のボランティア従事時間に応じて会社が寄付金を提出する制度があり、完成した備中とともに、活動資金の面でも支えられています。社員一人ひとりの行動を後押しし、被災者支援とのつながりを生み出してくださるこの仕組みに、心より感謝申し上げます。



Wolt Japan株式会社

フードデリバリーサービスを提供するWolt Japan株式会社様は、100円から寄付できる緊急募金ページを立ち上げ、能登半島地震の被災者支援に向けて多くのお客様へご協力を呼びかけてくださいました。2024年度にお預かりしたご寄付は、被災地での支援活動のために大切に活用させていただいております。ウクライナ人道支援時にも同様の取り組みを実施されており、社会課題に素早く反応し、支援の機会を広げてくださる姿勢に、心より感謝申し上げます。



JESSE (RIZE / The BONEZ)、JASMINE、B.I.G. JOE、AUDIO RADICAL

アーティストのJESSEさん (RIZE / The BONEZ)、JASMINEさん、B.I.G. JOEさん、AUDIO RADICALさんによるチャリティソング「Keep your head up」が2024年9月にリリースされました。この楽曲には、災害で被災した方々が未来に希望を持てるようにという願いが込められており、公開から半年の再生収益が、能登半島地震被災者支援のためのご寄付となりました。JESSEさんは以前にもポータルを跨るバンドのグッズ販売によるご寄付を届けてくださっています。被災者に寄り添い続ける姿勢に心より感謝申し上げます。



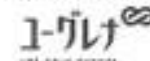
株式会社エスピーオー

株式会社エスピーオー様は、2024年4月27日に開催された台湾ドラマイベント「VBLシリーズ ファンミーティング in TOKYO〜東京でV8に会おう!〜」の売上の一部を、台湾東部沖地震の被災者支援のためにご寄付くださいました。ファンの皆さまとともに育まれた温かい思いを、被災地への支援につなげてくださったことに、心より感謝申し上げます。アジアの文化を尊重し、相互理解を深めることを大切にされている同社の理念が、このご厚意にも表れています。



株式会社ユウグレナ

株式会社ユウグレナ様は、合併前の株式会社LIGUNA様ならびに前身の有限会社あきらい様頃から温かいご支援をいただいています。あきらい様製品をご愛用の会員様が、お買い物でたまったポイントを募金に充てることができる仕組みを通じてネパールでの地震被災者支援や教育支援、台風15号被災者支援、東日本大震災復興、能登半島地震被災者支援など、国内外の困難な状況にある方々に寄り添う力を届けてくださいました。心より感謝申し上げます。



ジェイビーシー株式会社

電子部品・半導体の輸入・販売を手がけるジェイビーシー株式会社様は、かつてウクライナにも拠点を構えていた企業です。「当時、ウクライナの方にたくさん助けていただいた」という深い関係性を背景に、2022年のウクライナ人道危機発生当初から継続してご支援くださり、2024年度からは「毎月寄付」によって、ウクライナの人々の生活再建や心のケアを支えてくださっています。ビジネスの枠を超えて、人とのつながりを大切に、行動で示してくださる姿勢に心から感謝しております。



白玉醸造株式会社

明治37年に鹿児島県大根占村で創業し、長く焼酎づくりに携わる白玉醸造株式会社様より、2021年度から5年連続でご寄付をいただいております。ADRAと母体を同じくする三育関係の学校をご子息が卒業されたことから、2022年度にはウクライナ人道支援への指定寄付を、その他は「必要となる」とご信頼をお寄せいただき、国内外の緊急支援や見過ごされがちな地域での活動にも幅広く活用させていただいております。継続したご支援は、私たちにとっても大きな励みとなっています。

白玉醸造株式会社

株式会社マスマホールディングス

マスマ電設・マスマライナーズ・マスマ開発を擁する株式会社マスマホールディングスより、能登半島地震の被災者支援に多大なるご寄付をいただきました。同社は、電気設備工事や保守、施設管理など、地域の暮らしを支える事業に取り組まれており、以前は、ウクライナ人道支援にもご寄付をいただいております。災害や紛争の被害にあい、それまでの日常生活を突如奪われてしまった人々へのあたたかな思いに、深く感謝申し上げます。



全国友の会

全国友の会様は、1930年に発足した歴史ある団体です。創立者羽仁もと子氏の「家庭は簡素に社会は豊富に」の思想のもと、愛と協力による平和な社会の実現を願って、時に応じてさまざまな動きを続けておられます。災害時にはいち早く被災地を思い、2022年にはADRAのウクライナ人道支援に、2024年にはバブアニューギニア地滑り被災者支援に多大なるご寄付をお寄せいただきました。家庭や地域を大切にされる全国友の会の皆さまのお気持ちが、遠く離れた被災地にも届き、支えとなっています。



アール・エフ・ヤマカワ株式会社

オフィス家具メーカーのアール・エフ・ヤマカワ株式会社様は、環境に配慮した製品づくりや廃棄物の削減、地域への貢献など、サステナブルな社会づくりに積極的に取り組んでおられます。余剰在庫による国際協力についてもかねてよりご検討されており、台湾地震被災者支援のために、200点以上をご寄付いただきました。ADRAの在庫寄付プログラムを通じて換金した売却益を台湾地震被災者支援のために活用させていただいております。



WE21ジャパン・グループ

神奈川県を中心に、32のWE21地域NPOが41のWEショップを運営して形成されているWE21ジャパン・グループ様は、地域に根ざしたリユース活動や国際協力に力を注いでおられます。2024年度は、WE21ジャパン・旭/いずみ/にのみや/藤沢/みなみの5つの地域NPOよりADRAにご寄付をお寄せいただきました。各地での活動を通じて得た収益や募金を、遠く離れた人びとの支援へとつなげるその力は、まさに草の根のネットワークによる支えです。長年にわたる継続的なご支援に、心より感謝申し上げます。



「ちくちくボランティア」へご参加いただいた皆さま

アストラゼネカ(株) / イソップ・ジャパン(株) / (株)イオン銀行 オムロン(株) / (株)ジェーシービー / グラクソ・スミスクライン(株) / (株)三菱UFJフィナンシャルグループ / (株)日新火災情報システム / (株)ベネッセスタイルケア / ボンセジュール四つ木 / サノフィ(株) / セイコーエプソン(株) / ソニーグループ / 積水メディカル(株) / 日新火災海上保険(株) / パナソニックオペレーションズエクセレンス(株) / パナソニック マーケティング ジャパン(株) / パナソニックホールディングス(株) / 東都積水(株) / 三菱UFJ銀行(株)

Special Thanks

2024年度は、延べ2,414人・団体の皆さまから
総計 8,898件のご寄付を頂きました。

ご寄付いただいた企業・団体のリスト (順不同・敬称略)

- 株式会社 ファーストリテイリング
- 株式会社 ジャパンテクニカルソフトウェア
- 白玉醸造 株式会社
- 株式会社 ユーグレナ
- 株式会社 エスピーオー
- 株式会社 マスミホールディングス
- 全国友の会
- 日本ユーラシア協会
- 株式会社 J-オイルミルズ 経営推進部 経営推進グループ
- ジェイビーシー 株式会社
- 株式会社 TENMEI
- 日本キリスト教団 愛知教会
- Wolt Japan 株式会社
- 株式会社 原田
- 株式会社 DoubleUC&C Japan
- ときわ不動産鑑定 株式会社
- 関東学院中学校・高等学校
- (特活)WE21ジャパンいづみ
- 住友ファーマ労働組合
- 株式会社 ジェーシービー
- アール・エフ・ヤマカワ 株式会社
- サントミ工業 株式会社
- 一般社団法人 医薬経営研鑽会
- 株式会社 エルカナ
- 株式会社 ミドレスト
- 合同会社 ウェルライフ
- 有限会社 オートクラブ
- 電友商事 株式会社
- 八重岳ベーカーリー
- 木の葉幼稚園
- SUSHI SAMURAI GROUP
- 株式会社 ナイスマン
- 株式会社 日比谷花壇
- コーロ・エスペランサ
- (特活)WE21ジャパンにのみや
- 株式会社 クロスアーツ
- (特活)WE21ジャパン旭
- 本田医院
- 聖愛学園 認定こども園 のぞみ
- 原宿青少年少女合唱団
- 株式会社 かまちまちてらす岡上
- 合同会社 高山工房
- 日本キリスト教団 紅葉坂教会
- 詩恩 株式会社
- モトフジ工業 株式会社
- 株式会社 伊太利亜飯店華埠里銀座
- Monajicos〜モナジコス〜
- Lottadesgin
- 石油連盟
- 袋井東 まちづくり協議会
- 株式会社 ライフエッグ
- 株式会社 Kadoyaアウトラグズ
- 雲仙岳災害記念館
- 株式会社 インテレット
- 株式会社 ファーゴ
- アイグズ 株式会社
- 三綱 株式会社
- 鎌倉水彩画塾 株式会社
- 恵啓パロックアンサンブル
- 花乃幼稚園
- 積水メディカル 株式会社
- 名取市シルバー人材センター
- 日本基督教団 藤沢教会
- 株式会社 伊藤硝子店
- たてなか療養院
- 株式会社 オムニバス
- 京都伝統工芸 共同事務所
- 株式会社 ギバース
- 合同会社 バステルブラネット

他

ご寄付いただいた、セブンスデー・アドベンチスト教団および関係機関

神戸有野台教会 / SAN-IKU GAKUIN SANTA CLARA Japanese School / 広島三育学院 / 東京三育小学校 / 広島三育学院小学校 / 横浜教会 / 亀甲山教会 / 広島教会 / 大岡山教会 / 戸田教会 / 札幌教会 / 神戸教会 / 函館三育小学校 / 広島三育学院教会 / 横浜三育小学校 / 沖縄三育中学校 / 石川教会 / 沖縄国際教会 / 立川教会 / 広島三育学院幼稚園 / 三育学院中等教育学校 / 鹿児島三育小学校 / 横浜寛政教会 / 鹿児島三育幼稚園 / 小倉井教会 / 四ッ谷教会 / 三育・東京クリスマスコンサート事務局 / 徳島集会所 / 鎌倉教会 / 光風台教会 / 東京中央教会 / 多摩永山教会 / 国府教会 / 三育学院大学 / 山形教会 / 京都教会 / 船橋教会 / 札幌三育小学校 / 鹿児島教会 / 天沼教会 / 米子教会 / 宮崎教会 / 入間川教会 / 奈良教会 / 高知教会 / 東京聖人集会所 / 藤沢教会 / 名古屋聖人聖書研究会 / 千葉教会 / AMC 時の森教会 / 函館三育認定こども園 / 大阪センター教会 / 東京衛生アドベンチスト病院 / 光風台三育小学校 / 足立教会 / 石川三育保育園 / びお湖教会 / 静岡教会 / 三育学院教会 / 大宮教会 / 八王子教会 / 北道三育教会 / 長野教会 / 横浜三育幼稚園 / 久慈川三育小学校 / シェローム横浜 / 久慈川教会 / 土佐山田集会所 / コザ教会 / 伊賀上野聖書研究会 / 岡山教会 / 所沢教会 / 小田原教会 / 世田谷教会 / 都立教会 / 八尾聖書研究会 / 広島三育学院中学校 / 藤沢教会 / アドベンチストメディカルセンター / 徳山集会所 / 札幌三育幼稚園 / 佐世保教会 / 浦和教会 / 小樽集会所 / 刈谷教会 / 長崎集会所 / 西栗橋教会 / 木更津教会 / 茅ヶ崎集会所 / 久留米教会 / 会町教会 / 市原集会所 / 富山集会所 / 福岡教会 / 西宮教会 / 苫小牧教会 / 保土ヶ谷教会 / 仙台教会 / 名護教会 / 防府集会所 / 岐阜教会 / 三育袖ヶ浜教会 / 与那原教会 / 南部教会 / 相模原集会所 / 春日原集会所 / 茂原教会 / 保土ヶ谷集会所 / 青森南教会 / 千葉教会 / 安中集会所 / 姫路教会 / 三育フーズ株式会社 / 神川聖書研究会 / 秋田教会 / 奥羽教会 / シェローム名護集会所 / 波方聖書研究会 / 和歌山教会 他

2024年度 メディア掲載

2024年度はこちらのメディアの方々に
ADRA Japanを取り上げていただきました

掲載日	掲載メディア	掲載内容
2024/4/4	ELEMINIST	台湾花蓮地震における寄付・緊急支援先団体のひとつとして、ADRAが紹介されました。
2024/4/5	NHK NEWS WEB EASY	「台湾で大きな地震の被害「今度は日本が助けましょう」の記事にて、ADRAが寄付を集めている団体として紹介されました。
2024/5/3	テレビ金沢公式Youtube	熊登の今を伝える「いま、ここから」のコーナーで「さざしcafe」が取り上げられ、スタッフがインタビューに応じる様子が紹介されました。
2024/5/26	ABEMA的ニュースショー	ジンバブエ駐在のスタッフが取材を受け、ジンバブエゴールドの発行やハイパーインフレ以降のジンバブエでの生活、現地での仕事内容について紹介されました。
2024/6/7	北越中日新聞	石川県穴水町内に設置した「復興のさざしカフェ」に関する記事が紹介されました。
2024/7/29	静岡新聞	袋井市の中学生と熊登半島でボランティア活動をしたことについて取り上げられました。
2024/9/3	"MONTSAME News Agency (モンゴル国営モンツァメ通信社)"	バヤン・オルギイルで実施しているプロジェクト「異常気象に強い農業」の資金元としてADRA Japanが紹介されました。
2024/10/8	サードニュース	JASMINEさん、JESSEさん、BIG JOEさん、AUDIO RADICALさんが共同制作した熊登半島復興支援チャリティソング「Keep Your Head Up」のリリースが紹介されました。
2024/10/25	サードニュース	「ADRA Japanが熊本で未来を彩る新キャンペーンを発表！」と題し、モアベターキャンペーンをご紹介いただきました。
2024/12/21	茨城新聞	昨年度に続き、茨城県取手市で三育学院中等教育学校によるコンサートを実施した様子が取り上げられました。
2024/12/24	ギビングチuesdayー・ジャパン	海外旅行で会った小銭や紙幣を慈善団体に寄付する方法が掲載され、その中でADRA Japanも紹介されました。
2025/2/12	YOU-USE	ADRAが、東京マラソン2025チャリティに寄付先団体として参加し、チャリティランナーのおもてなしをするボランティアを募集していることが掲載されました。
2025/3/5	広報わくら 清濁の風	震災以来、石川県七尾市和倉地区で支援活動を続けている団体として、活動実績とスタッフのメッセージが掲載されました。

プレスリリース配信による掲載

掲載日	記事タイトル	掲載媒体数
2024/5/3	台湾地震から1か月、復興は今	30
2024/5/15	ブラジル義勇ネット基金はじまる	27
2024/5/20	【東京マラソン2025チャリティ】認定NPO法人 ADRA Japan(アドラ・ジャパン) 寄付先団体として参加決定	51
2024/5/29	バブア地滑りネット基金はじまる	50
2024/6/6	モンゴル「生計向上と自立支援を」	42
2024/6/25	【東京マラソン2025チャリティ】認定NPO法人 ADRA Japan(アドラ・ジャパン)、ご寄付とチャリティランナーを募集開始。	48
2024/8/19	インド「豪雨による洪水と地滑りで被災した方に寄り添う支援を」	29
2024/8/23	モノ作りボランティア募集の啓発	45
2024/9/10	ウクライナ語 翻訳ボランティア募集！	46
2024/9/12	五輪太郎さんの「みんなのひつじさん」と共にモンゴルのひつじをふむふむにするプロジェクト始動	21
2024/9/13	ネット基金開始！アジア台風被害	46
2024/10/3	レバノン空爆、避難民に支援を！	44
2024/10/8	人気アーティストによる新曲「Keep Your Head Up」がリリースされました。熊登半島の復興を願いチャリティソングに！	25
2024/10/25	アンケートご協力のお礼	23
2024/11/6	クリックで送れる、未来への給食	32
2024/11/8	3連続の台風でフィリピンが甚大な被害	32
2024/11/19	フィリピン台風被災者支援	47
2024/12/13	ウクライナの子どもたちに希望を届けるクリスマス基金キャンペーン開始	53
2024/12/27	エチオピア北部紛争の影響で暮らす11,300人へ緊急支援を開始！	44
2025/2/7	【ボランティア募集】アドラスタッフと一緒に東京マラソン2025を走るADRAのチャリティランナーの皆さまや東京マラソンEXPO 2025のご来場者をおもてなしする寄付先団体ブースや個別ブースの運営！	47
2025/3/27	東京マラソン2026チャリティについて/Tokyo Marathon 2026 Charity	24
2025/3/29	ミャンマー緊急基金！100年で最大の地震により被害甚大	54

ADRA Japanの情報発信



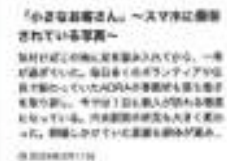
支援活動情報をお伝えする季刊誌
ADRA Newsを年4回発行しました。
活動の報告や、スタッフが見た現場の
シーンをお伝えしています。



年に1回、年次報告書を発行しています。2023年の年次報告書の表紙は、能登半島地震被災者支援から、ADRA災害対応バスの中で足湯を楽しむ姉妹の様子は、周りの人のことも笑顔にしていました。全36ページでWEBからもお読みいただけます。



2024年はスタッフ個人の現場での思いや、日ごろ考えていることなどの発信に力を入れました。支援現場での誰との出会いなど、個性的なブログもありますので、ぜひお読みになってください。



その他の取り組み

- ・ブログの作成とアップ数:304本
- ・メルマガ発行数:34通(号外含む)
- ・YouTubeの動画アップ数:9本
- ・公式LINE投稿数:26回



今、注目の取り組み

＜外国コイン・紙幣・切手のご寄付を受け付け中です＞

支援に参加しやすいカタチのひとつとして、外国コイン・紙幣・切手のご寄付を受け付けています。国名・発行年代など一切問わず、銀行で再替できなかった紙幣や古紙幣も大歓迎。受け取った外貨・切手は換金し、貧困や災害、紛争などの影響を受けた人々に寄り添い、自立を支えるための活動資金となります。おうちで眠っているコイン等があればぜひお送りください。



ADRA Japanについて

(2025年3月31日現在)

名 称	特定非営利活動法人ADRA Japan(アドラ・ジャパン)
設 立 年 月 日	1985年3月30日(法人格取得:2004年4月13日) (認定NPO法人格取得:2016年4月18日(2021年更新済))
代 表 者	柴田 俊生(理事長)
事 務 局 責 任 者	青木 泰樹(常務理事/事務局長)
監 査 会 員	鈴木智子 公認会計士事務所
職 員 数	正会員52人・団体、賛助会員91人・団体
理 事	29人
監 事	柴田 俊生、青木 泰樹、芦田 一毅、浦島 靖成、小野 りちこ 杉 正純、瀬戸 典子、高原 信夫、藤本 秀幸
マンスリーサポーター (ADRAフレンドとして 支えてくださっている方)	千原 曜、高橋 愛一郎 430人・団体

主な加盟ネットワーク

- 特定非営利活動法人 ジャパン・プラットフォーム (JPF)
 - 特定非営利活動法人 国際協力NGOセンター (JANIC)
 - 日本UNHCR-NGOs評議会 (J-FUN: Japan Forum for UNHCR and NGOs)
 - 教育協力NGOネットワーク (JNNE)
 - 地球規模問題イニシアティブ及び沖縄感染症対策イニシアティブに関する外務省／NGO懇談会 (GII/IDI 懇談会)
 - 日本安全管理イニシアティブ (JaNNIS)
 - 全国災害ボランティア災害支援団体ネットワーク (JVOAD)
 - 緊急災害対応アライアンス「SEMA」
 - 震災がつなぐ全国ネットワーク
 - 東京災害ボランティアネットワーク
 - アクションプラン推進会議
 - 防災・減災日本CSOネットワーク (JCC-DRR)
 - 災害協働サポート東京 (CS-Tokyo)
- 他 (順不同)

活動計算書

特定非営利活動に係る事業

2024年4月1日から2025年3月31日

科目		金額
収入	会費	1,521,000
	寄付金	55,281,386
	プロジェクト指定寄付金	155,666,500
	物品寄付	907,901
	助成金・補助金等	600,686,548
	事業収益	577,194
	その他収益(利息など)	836,789
合計		815,477,318
支出	ネパール	71,589,236
	ジンバブエ	103,492,105
	モンゴル	12,066,051
	エチオピア	46,485,242
	ウクライナ	167,602,998
	イエメン	69,107,831
	ミャンマー	81,583,807
	アフガニスタン	82,676,125
	東日本、防災・減災啓発	5,194,240
	国内災害被災者支援	236,030
	能登半島地震被災者支援	88,226,999
	小規模支援事業・事業形成	5,933,538
	緊急支援事業の調査、資金支援等	10,796,810
	インターン受け入れ	1,169,574
	講師派遣	132,881
	関係機関との連携	37,611
	啓発活動	2,131,842
	人件費	41,196,585
	事務所運営費	33,028,998
	合計	822,688,503
当期収支差額		▲ 7,211,185
前期繰越		166,509,261
次期繰越		159,298,076

収入	補助金・指定プロジェクト寄付金	592,104,882
支出	一般正味財産へ振替	▲ 709,142,328
当期収支差額		▲ 117,037,446
前期繰越		236,198,637
次期繰越		119,161,191

正味財産次期繰越	278,459,267
----------	-------------

Yahoo!ネット募金	
延べ9,322名様より	8,137,221円
書き損じはがきや切手寄付、古本などの物品寄付	
延べ127名様より	約91万円相当
チャリティ自動販売機	
	293,066円

貸借対照表

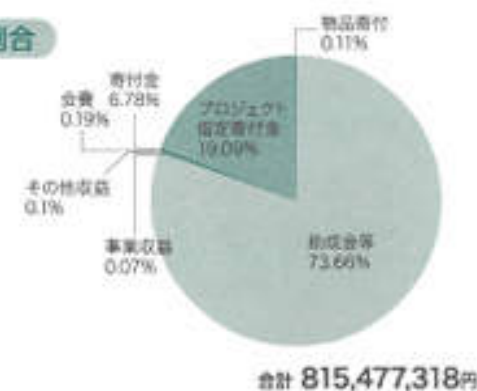
特定非営利活動に係る事業

2025年3月31日現在

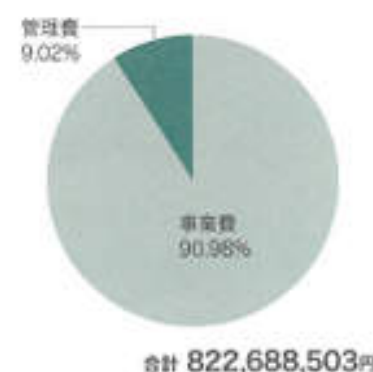
科目		金額
流動資産	現金預金	166,269,201
	特定預金	349,399,930
	未収入金	5,317,963
	前渡金	392,830
	前払費用	1,491,791
	事業前渡金	102,687,153
	貯蔵品	302,691
	合計	625,861,559
固定資産	有形資産	1,511,339
	什器備品	4,644,916
	特定資産	10,955,786
	車両運搬具	1,310,663
	機械装置	281,810
合計		18,704,514
合計		644,566,073

科目		金額
流動負債	未払金	37,274,936
	預り金	415,591
	前受金	328,306,279
	合計	365,996,806
正味財産の部	指定プロジェクト寄付金	103,654,400
	補助金等	15,506,791
	合計	119,161,191
一般正味財産		159,298,076
合計		278,459,267
負債および正味財産合計		644,456,073

収入割合



支出割合



2025年度の基本方針

ADRA Japanは2023年～2025年度の中期ビジョンとして、「一つひとつの命を大切にする社会の環(わ)を広げる活動・取り組みの創出と運営基盤の強化」を掲げました。この実現に向けて、「ニーズに応える活動」「成長する組織」「安定した財務」の3つを柱とする13の基本方針を立て、それぞれの取り組みを継続しています。

1 ニーズに応える活動

- 1) 事業の方向性・優先度を明確化し、緊急支援と開発支援による両輪の事業運営を確立する
- 2) よりよい活動を行うために、公的資金以外の取り組みの拡大を目指す
- 3) 事業の創出・運営に係るガイドラインを整備し、ニーズに効率的・効果的に応える体制を強化する
- 4) 活動の共感獲得に向けて、啓発に力を入れる
- 5) リスクマネジメント体制・仕組みを構築する

2 成長する組織

- 1) 団体として共有したい価値観と求める人物像を示し、団体職員を確保する
- 2) 職場としての魅力を共有できる機会を整備し、職員の定着率向上を図る
- 3) 職員のキャリア形成に対する教育制度や人事システムを構築する
- 4) 業務で培われた個人の知見やスキルを団体内で共有し、活用しやすいシステムを整える
- 5) 主体的な活動をする上で行動の指針となる規程やJob Descriptionを再整備する

3 安定した財務

- 1) 活動の拡大や組織の基盤構築のために、公的資金に頼らない財源を拡充する
- 2) 非常時においても支援活動を継続できるよう、リザーブ資金を確保する
- 3) 自主事業の立案・実績報告等に関する管理方針を発展させる

2024年度は、上記方針に主体的に取り組む5つのタスクフォースを継続し、具体的な成果に向け、情報収集やディスカッションを重ね、ビジョンの達成に向けて前進しました。最終年となる2025年度は、ADRA Japanの40周年でもあるため、これまで支えてくださった多くの方々に感謝しつつ、団体がより成熟していくことのできる節目の年とし、この活動をさらに加速していきます。

Mission Statement

ADRA Japan は、世界各地において今なお著しく損なわれている
人間としての尊厳の回復と維持を実現します。

Vision Statement

ADRA Japan は、各国ADRA 支部と連携し、
専門的かつ効果的な活動を誠実に行ないます。
また、国際社会に貢献できる人材を育成し、国際協力に関する啓発を行います。

Value Statement

ADRA Japan は、キリスト教精神を基盤として活動します。
ADRA Japan は、人種・宗教・政治の区別なく活動します。
ADRA Japan は、現地のニーズに基づいて活動します。
ADRA Japan は、人々の自立を目指して活動します。
ADRA Japan は、「ひとつの命から世界を変える」をモットーに、
一人ひとりに寄り添って活動します。

認定NPO法人 **ADRA Japan** (アドラ・ジャパン)

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前1-11-1
TEL:03-5410-0045 FAX:03-5474-2042
Mail:support_adra@adrajpn.org
WEB:<https://www.adrajpn.org>
Facebook:<https://www.facebook.com/adrajapan>
X(旧Twitter):ADRA_Japan
Instagram:adra_japan
YouTube:@ADRA_Japan



WEB



Facebook



X(旧Twitter)



Instagram



YouTube